

主張

金属労協副議長／日本基幹産業労働組合連合会中央執行委員長 神田 健一

こころざし・その先に

責任ある組織として

基幹労連は、産別統合によって2003年9月9日に結成し、もう間もなく20年を迎える。大人の仲間入りができるのか、残り3年と半年を新たな飛躍に向けた期間にしなければならぬ。

ナショナルセンター連合は、昨年、官民統合による結成から30年を迎えた。その節目にあたり、連合30年ビジョン「働くことを軸とする安心社会―まもる・つなぐ・創り出す―」を策定し、政策の実現に向けて内部論議を重ね、出来得るものから具体的な取り組みを進めている。その実効ある取り組みは、連合を構成する産別組織が呼応し、各組織の特色も活かしながら進めてこそ成し得る。もちろん、言うは容易く行うは難し、いかに構成

組織全体の動きとして推し進めていくのかは、労働運動が常に抱える古くて新しい課題でもある。

そうした意味合いにおいて、産別組織の取り組みにも投げかけられている課題であることは間違いない。

「理がなければ人は振り向かず、情がなければ人は動かず。」云いようは違っても、こうした言葉が先輩方の口癖でもあった。そして、何より、リーダーの熱い思いと行動が大切だと続く。精神論だけで片付けられるものではないが、労働運動の根底に据えてきた熱い思いが事を成すことは、労働運動の歴史や労使関係、産業・企業の危機的な状況において、困難に屈しない強い意志や意気、まさに気概が幾多の困難をも乗り越えてきたことは先達が残してくれている。

熱い思いを語れているか

ところで、ある労働運動評論家の

話に感銘し、組合の研修会で話すことがある。その指摘は、今日の労働組合、あるいは組合リーダーに一番欠けているものは、現実の厳しさや対処に追われ、夢を語るものが少なくなってきたてはいないか、「われわれは何を目指し、どうなるうとしているのか」を熱くかつ力強く、自信を持って組合員・仲間語れているだろうか。今日の組合役員の口から出てくる言葉といえば、「厳しい、難しい、大変」といった後ろ向きかつ暗い言葉の連続。しかも、上から下ろされてくる組合活動を忠実に実行する、過去の時代の活動継続を是とする活動スタイルである。自分たちは、どんな組合に、どんな会社になりたいのか、どんな職場を作ろうと

しているのか、それを語り続けること。そして、それを決して諦めたりしてはならないということである。

組合リーダー・役員が、直面する問題・危機に常に当事者意識を持って突き進む、「現実＋自分たちのできること＝目標」を持つこと、そんな意識が組合役員として、リーダーとして必要なことと受け止めている。

私は、労働組合の究極の目的は、組合員とその家族の幸せ追求にあると説いている。しかし、それは決して自分たちのことさえよければよいというエゴではない。その目的達成のためには、関係する組織との連携があつてこそ。

個々の組合・支部の取り組みが、企業連・単組の活動を支え、産別運動へとつながり、その延長線上にあるナショナルセンター連合の運動

へと発展することで、すべての働く者・生活者の幸せ追求につながるということに基づき労連の共通認識にしようというものである。

生産性運動と労使の役割

他方、超少子高齢社会を迎えたわが国は、いわゆる団塊ジュニア世代が65歳以上となる2040年頃に向けて労働力人口の減少が加速する人口構造の変化の中で、社会や経済の活力を維持・向上することは重要な課題となっている。AIの進展による第4次産業革命といわれる新たな社会構造の変化は、労働運動の面においても大きな変革を求められることは間違いないが、いかなる環境変化があろうとも労働運動は人と人とのつながり、組織と組織のつながりであらゆる変化に対応してきた。

足もとで広がりを見せる格差・差別、そしてデジタル社会という新たな時代に危惧される格差・差別、これらを阻止していくことが、組合員とその家族、そしてすべての働く者・生活者の幸せ追求につながるのと強い思いをもって役目を果たしていかなければならない。その取り組みには、政・労・使の役割も忘れてはならない。全労生運

動は昨年60年を迎えた。「雇用の維持・拡大、労使の協力・協議、成果の公正分配」を掲げた生産性運動三原則、とりわけ、労使の協力・協議は、労働諸条件決定のみならず、競争力強化と働き方、一人一人のやりがいと成長、労使が直面する諸課題を徹底して話し合い、確かな将来と強い信頼関係を築き、もって相互に好循環を形づくる場でもある。

大きく変わりゆく社会の中で、産業・企業の永続的な発展、その原動力となる働く仲間の活力と気概をどう醸成していくのか、労使でその役割を担うことは結果として産業・企業、わが国経済・社会の好循環につながるものであり、まさに持続可能性を求める労使の大切な宝でもある。経営の思いと働く者の思い、目には見えぬが労使の心のつながり、緊張と信頼の労使関係を大切にする

ことが、あらゆるものを好循環に導くのではなからうか。本誌が発行される頃には、概ね2020春季交渉の回答が出そう頃かもしれないが、春季労使交渉の意義は、そうした面を持つこともあらためてつないでいかなければならない。

ど真ん中に人・心でつなぐ

金属労協の大先輩である古賀連合総研理事長に、こんな教えを賜った。「私たちは変化や変革が常態化する時代を生きている。こんな時代だからこそ、漫然と迎える未来から主体性を持った新たな創造・築く未来へ向けて、どんな環境下におかれても自分自身をコントロールし、前に進むための努力を怠らないことだろう。」

次なる社会は、AIが闊歩し、風の吹き方も、その強さも向きも、大きく変わるかもしれないが、持続可能な経済・社会のためには、やっば

りど真ん中に人である。足もとの課題を精査し活動を定め、先を見つめつつ目標を決め、仲間との知恵だしと力合わせで、確実に、着実に実践していくためにも、理を示し、情を持ち、心でつなぐ運動を大切にしていかなければならない。

こんな言葉を聞いたことはあるだろうか、「命は大切だ。命を大切に。そんなこと何千万回言われるより、『貴方が大切だ』誰かがそう言ってくれたら、それだけで生きていける。」相手の思い、仲間の思いにこたえられる、そんなリーダーになりた。いやもう遅い。そんなリーダーを育てていきたい。ご安全に



金属労協副議長／基幹労連中央執行委員長
神田 健一 かんた・けんいち

- 1958年12月生まれ
- 1977年3月 新日本製鐵株式会社(現・日本製鐵株式会社)入社
- 1988年9月 新日本製鐵大分労組(現・日本製鐵大分労組)執行委員
- 1996年9月 同 書記長
- 2000年9月 新日本製鐵労連常任中央執行委員
- 2004年9月 新日本製鐵大分労組書記長
- 2006年9月 基幹労連事務局次長
- 2010年9月 新日本製鐵大分労組組合長
- 2014年9月 基幹労連事務局次長
- 2017年9月 同 中央執行委員長(現)、金属労協副議長(現)
- 2017年10月 連合副会長(現)